

レヴィナスにおける他者の死と自己同一性

—ハイデガーにおける現存在との比較を通して—

On the Death of Others and Identity in Emmanuel Levinas

:Comparison with “Dasein” in Heidegger

山口 美和
Yamaguchi Miwa

キーワード：死 他者 自己同一性 倫理的責任 唯一性

1. 問題の所在

本稿の目的は、エマニュエル・レヴィナスの思想を手がかりに、他者の死がひとの生に対してどのような意味を持ちうるのかを明らかにすることである。

ひとは、生きていく途上で、他者の死に直面することがある。とりわけ家族や親しい友人など、身近な他者の死は、そのひとの人生に大きな衝撃を与え、深刻な影響をもたらす。人間という存在を変化生成の相から捉えるとき、人の生に大きな影響を与える出来事のひとつとして、他者の死という誰もが会おう事象を捉え返し、それが主体の形成にどのような意味を持つのかを考察することには、一定の意義があると考えられる。

教育学の分野において、他者の死に直面したときの深刻な体験を、人間の生における危機 (Krise)¹ののひとつとして、人間学的視点から捉え直したのはO.F.ボルノーであった。ボルノーは、「身近な人間の喪失」は、私の所有している個々の事物の喪失に比せられるような「世界内の喪失」ではなく、「世界一般にかかわる喪失」、すなわち「その喪失を蒙る者の固有の実体にかかわる喪失」であり、固有の実存を揺り動かす「真の存在喪失」であると述べる²。とりわけ、愛や友情によって結ばれた関係にあった他者が死に至るとき、それまでその他者と共同で構築してきた生活領域が崩壊し、遺された者が具体的に経験する世界の領域は狭くなるという。というのも、どんな喜び、どんな理解や認識も、これをともに喜び、ともに理解して受け入れる他者を必要とするからである。この意味で、身近な他者の死は、直接的な自己の生の喪失ではなくとも、そのひとの生活や体験の可能性を減少させることによって、自己の生を「収縮」さ

せるのである。ボルノーは言う。「遺された者が見出す状態は実際、一つの自己の死の状態である」³と。

しかし、ボルノーの分析では、なぜ、ひとが身近なひとを喪っても、なお生き続けることができるのか、あるいは生き続けなければならないのか、という切実な問いに対する答えは与えられない。たとえば震災で多くの身内を同時に喪った人々が、ボルノーの言う「一つの自己の死」の状態に置かれても、自分ひとりが生き残った苦しみと罪責感の中でなお生き続けることに意味を見出すことはできるのだろうか？ あるいは、意味を見出すことは困難だとしても、生き続けなければならないと、多くの人が事実として自己に命じるのはなぜだろうか。

本稿では、他者に対する責任と倫理を、自己の存在に先立つものとする E.レヴィナスの主張を読み解くことによって、他者の死に伴って生じるこれらの問いを正面から取り上げる。そして、他者の死を眼の前にしたとき、私が憑き動かされる原動力となるある種の情動を、死という虚無への恐れ——すなわち自己の存在が無になることへの不安——とは異なる仕方で描くことを目指している。

レヴィナスの思想を読み解くために、本稿が分析の対象とするのは、1975年11月から1976年5月にかけて、ソルボンヌにおいて行われた最終講義「死と時間」の講義録である⁴。

この講義録を取り上げるのは、この講義が時間という視点から死を探究することを目的としたものであり、特に死を、存在との対比における「虚無」に還元しない道が模索されているためである。レヴィナスにとって死は時間性と密接にかかわるものであるが、それは自己が無となることの了解や、経験には還元不能なものである。レヴィナスは本講義で、死に対してハイデガーが存在論的に付与した意味とは「別の意味」を明らかにしようとしており、それは、『他者の死』において私たちに関わるものから到来」(DMTp.19=14頁)すると考えるのである。

本講義録を取り上げるもうひとつの理由は、この講義が『全体性と無限』に続くレヴィナスの第二の名著『存在するとは別の仕方であるあるいは存在することの彼方へ』(1974)の執筆・出版と近接した時期に行われたものであり、同書において展開されたのと同様のテーマが取り上げられている点にある。「隔時性」「身代わり」といった独特な表現が用いられているために、非常に難解な同書の議論と比べ、この講義では、時間と他者に関する議論が、ハイデガーやフッサールなど、他の哲学者の主張との対話を通して丁寧に論じられており、レヴィナスの思考の過程が比較的わかりやすいものとなっている。

本講義録の序文を書いたジャック・ロランも、この講義が、「大胆不敵で荒々しい『存在するとは別の仕方であるあるいは存在することの彼方へ』(1974)や、『観念に到来せし神について』(1982)にそのほとんどが収録されているいくつかの小論で、哲学的にこのうえもなく衝撃的な表現を見いだした、そうした様式(画家について言われるような意味での様式)に属している」⁵ことを指摘し、本講義で展開されている主張は、この時期の論考群ときわめて密接に結びついたものとして捉えるべきだと述べている。

以上のことから、レヴィナスの後期思想の中でも、本講義は重要な位置を占めていると考え、本稿の分析対象とした。

以下では、まず、「死と時間」におけるレヴィナスの問題設定を概観し、続いて、『存在と時間』において展開されているハイデガーの死と時間に関する議論に対するレヴィナスの解釈を論じる。

2. 経験と知から得られる死の様相

われわれは、死について何を知っているのだろうか。

われわれが、死や死ぬことについて、語ったり考えたりしうるものは、すべて間接的なものでしかない、とレヴィナスは言う。われわれが死を知るのは「ひとから伝え聞くことによって、あるいは経験にもとづく知識によって」(DMTp.17=11頁)である。死についての日常的な知識は、死に瀕している、あるいはいずれ死すべき他のひとを観察するという経験を通してわれわれに与えられる。

このように日常的な知識から、あるいは科学的な知識を通じて、われわれが死に対して持っているのは、死とは「諸存在を生者として現出せしめていたある種の表現の運動が消滅すること」(DMTp.17=12頁)であるという知識である。人間が生きているということの基盤には、生物として自動的に呼吸や代謝を行うという、いわば「植物的な運動」があるが、それだけで生の本質を汲み尽くせるものではない。むしろ、植物的な生命維持の過程は、ひとがひととして生きている限り、周囲に向かって表現され続ける「応答」の運動によって、覆い隠されるとともに意味を与えられる。この点から言えば、ひとの死とは、この「応答」の運動の停止を意味する。何よりもまず「死とは、応答がないということ」(DMTp.17=12頁)なのである。

「応答」という表現の運動の停止、すなわち不動化としての死は、「誰か」から解体可能な「何か」への還元である。言い換えれば、表現の停止は、「顔」という「他の存在様相を指揮するような存在様相」が無と化すことであり、死は、「存在から、否定という論理的操作の帰結とみなされた『もはや存在しないこと』への移行(傍点引用者)」(DMTp.17=12頁)である。

このように、通常、他人の死は「存在」の反対物として、すなわち「無」「虚無」として経験される。ここでレヴィナスがあらためて問うのは以下のことである。

「死との関係、死が私たちの生を襲うその仕方、私たちが生きている時間の持続に死がもたらす衝撃、時間の中への死の侵入——いや時間の外への死の噴出、恐怖と苦悩のなかで予感される死とのこうした関係ははたして、知識と、ひいては経験や啓示(révélation=直観的認識)と同一視しうるものなのでしょうか(括弧内の補足は引用者)」。(DMTp.19=13頁)

「知識(savoir)」や「経験(expérience)」は、いずれも認識にかかわるものであり、志向性によって把握されるものである。前に述べたように、誰かの死は、表現の消滅として「経験」されるが、レヴィナスに言わせれば、「ここにいう誰かはそもそもの初めから生物学的過程を超えており、そのような誰かとして私と結びつく(傍点引用者)」(DMTp.21=17頁)。死において停止する運動は、生物学的過程を超えた、「単なる現出には収まらない自己表現の運動」

(DMTp.20=16頁)であり、志向的意識による把握を逃れるものなのである。「誰かの死は、経験的事実性であるかの外観に尽きるものではない」(DMTp.21=17頁)。

レヴィナスは、死を、知や経験的な事象に還元することに異議を唱えることによって、志向性によって捉えられない次元を問おうとしているのである。それはまた、われわれ人間の死と生に対し、「存在するかしらないか」といった二項対立を超えた、別の「意味」を見いだそうとする試みであるといえよう。

レヴィナスが念頭においているのは、言うまでもなくハイデガーの『存在と時間』、とりわけ「死に向かう存在」として論じられた現存在の在り方である。次節では、ハイデガーの『存在と時間』の議論に対する、レヴィナスの解釈と批判を追うことにしよう。

3. ハイデガー存在論における死と時間

(1) ハイデガーとの対決の必然性——レヴィナスの主張の前提

ハイデガーの議論の検討に移る前に、注意しておかなければならないのは、ハイデガーが『存在と時間』において分析したのは、主に「私の死」と時間との関係であり、他者の死に関する直接の分析については、ごく短い言及があるだけだということである。「私の死」を起点として時間を論じたハイデガーの議論と、他者の死を重視して展開されているレヴィナスの議論とは、そもそも論点が異なると言えなくもない。しかし、本講義でレヴィナスは、ハイデガーの議論について検討することは「避けることのできない道」だとして、特に重視する⁶。この背景には、レヴィナス自身の死と時間に関する思考が、ハイデガーの存在論との対決の中で生まれ、それとの対話なくしては語れないという事情があるといえるだろう。

死と時間との関係に関するレヴィナス自身の主張は後節で詳しく述べることにするが、その主張に貫かれているいくつかの「前提」を、レヴィナスはあらかじめ明らかにしている。その前提とは以下のようなものである。

- ①死に関する経験がない以上、死を志向性として捉える解釈は揺るがざるをえない。
- ②他者の死や自分自身の死との関係を通じて情動性を確認することは、共通の尺度のない異なるものとの関係のうち他者や自分自身の死との関係を置くことである。この異なるものは、想起や予期による共時性に回収することはできない。
- ③こうした関係の中で、死との関係は、他者という法外なものを前にした際の問いかけとして到来する。
- ④フッサールにおいては、志向性が時間を編んでいたが、志向性は心性の究極的な秘密ではない。
- ⑤人間の存在 (*esse*) は、コナトゥスではなく、他者の代わりに人質 (*otage*) になることである。
- ⑥情動性は、無への不安にその根源があるのではない。(DMTp.30=29頁)

レヴィナスが示すこれらの前提は、いずれもフッサール現象学及びその流れを汲むハイデ

ガー存在論が前提としているものを問い直すものであるといえよう。意識の志向性、過去把持と未来予持によって取りまとめられる現在及び一連の流れとしての時間性、現存在の原理としてのコナトゥス (cōnātus) ——こうした枠組みによっては、死という「経験を超えるもの」は決して捉えられないというのがレヴィナスの立場なのである。

レヴィナスは、ハイデガーが前提としている「現存在」の存在様態を明らかにすることから、この問題に着手している。迂遠に思えるこの議論も、存在に関与しつつ生きる「現存在」という特異な存在者に対するハイデガーの理解の解明なくしては、死と人間との関係を、さらには死を起点として描かれた時間を解明することはできない、というレヴィナスのスタンスを示していると捉えることができる。それゆえ、われわれもレヴィナスの思考の歩みに従い、レヴィナスとともに、死という観点からハイデガーの『存在と時間』をあらためて読み解くことにしたい。もちろん、その議論を追うわれわれは、ハイデガーが現存在分析において取り上げるのは、あくまで「私の死」であるという点を銘記しておかねばならない。

(2) 自らの存在を問う者としての現存在

『存在と時間』の最初の部分で展開されているのは、レヴィナスの言葉で表現するなら「存在の動詞的意味に係わる問い」である。存在するという事態を解明するために、ハイデガーが現存在すなわち人間の存在様態からアプローチを行うのは、存在するという動詞が、すでに人間たちによって「存在論に先立つ仕方」で、つまり「前-存在論的」に了解されているからである。前-存在論的な存在了解には、存在についての問いがはさまれている。人間は、その本質的屬性からいって、「存在を了解し、存在に問いかける」(DMTp.32=33頁) 存在者である。このことをレヴィナスは以下のようにまとめている。

「人間が存在する仕方、存在するという仕事を人間がなし、存在するという営みを人間が継続する仕方、それが動詞的な意味での存在であり、存在は、存在するという動詞について問いかけることをまさに本義としているのです。(傍点引用者)」(DMTp.32=33頁)

このような問いかけ (interrogation) は、ひとが「存在するという営みをなすこと」そのものである。ここで生じる、問われているものと問う者との関係とは、ハイデガーが「各自性 (Jemanigkeit)」⁷ という名で呼ぶ特異な関係である。「各自性」とは、現存在がその存在においてつねに関わらされている存在が、そのつど「私の存在」であるような事態を指し示している。問う者と問われているものとの緊密な関係があつて初めて、「〈自我〉は厳密な仕方存在論から『演繹』され、存在から『演繹』されうる」。ハイデガーの存在論は、〈自我〉すなわち「この私」という人格的なものが、存在論的なものから「演繹」されることに、ひとつの特徴があるとレヴィナスは考えるのである。

人間は、「存在するというみずからの行いに即して営むべき存在を有しているがゆえに… (中略) 『存在しなければならない』」(DMTp.33=34頁)。この「存在しなければならない

(avoir-à-être)」という人間の本質は、レヴィナスに言わせればコナトゥス、すなわち「私」の存在を維持しようとする努力にほかならない。そして、各自性における固有の〈自我〉の出来とともに、死が「私」にとってもっとも固有なものであることも告知される。

「各自性においては、固有の問いかけを有さなければならないがゆえに、問いかけられる存在という事態が私の問いかけへと化します。…存在の問いのこのような引き受けが終末を伴っているということ、したがって死は私にもっとも固有なものであるということ——この点をやがてハイデガーは分析することになります。固有性の出来のうちで死はすでに告知されているのです」(DMT p.43=47頁)

現存在の自己性は、ある「可能性」をわがものにすることで本来的なものとする。この可能性は「譲り渡すことのもっとも困難なものであり、それゆえ回避不能なものでさえ」(DMTp.45=50頁)ある。ここにいう可能性、それが死なのである。

世界-内-存在としての現存在には、それが存在し続ける限り、つねに何か欠けており、その全体像を視野に収めることはできない。この「欠如」に対応しているのが「終末」、すなわち死である。したがって、「死とのなんらかの関係によって、現存在は全体と化す」(DMTp.44=49頁)はずである。この問題、すなわち現存在が全体と化すような死との関係とはどのような関係か、を解明するのが、ハイデガーの次の課題となるのである。

(3) 死に向かう存在——譲渡できない可能性としての死

さて、現存在の死という究極の可能性が視野に入るこの地点において、時間とは何かという問題が同時に問われることになる。

ハイデガーにおいては、現存在の「現」(世界-内-存在)は、次の三つの構造として記述される。すなわち、自己に先立って存在すること(投企)、すでにして世界にあること(事実性)、～のもとに(諸事物のもとに)存在するものとして世界にあること、である。これらは現存在の配慮の様態であるが、ここには、現存在における諸関係にもとづいてのみ記述されるような時間との係わりが見出される、とレヴィナスは指摘する。つまり、「投企」という自己に先立って存在する様態は「未来」、すでにして世界にある存在様態は「過去」、そして諸事物のもとに存在する様態は「現在」という時間性を示すのである。

では、死に臨む存在において、これらの三つの構造はどのように結びついているのだろうか。

死に向けて存在することは「自己に先立って存在すること」、すなわち現存在にとっての未来への投企である。「時間は死に臨む存在の未来であり、この未来は死に至る存在という比類なき関係によってのみ規定される未来である」(DMTpp.53-54=60頁)。死はたしかに「終わること」として捉えられるべきであるが、ハイデガーにとって、「終わること」は現存在が「最後に至った」ことを意味するわけではない。現存在という存在者は終末に向けて存在するものであり、この存在者における出来事とは自らの終末に向かうことである。存在しうる、という権能

(pouvoir) は、それ自体ですでに「終わりうる」という権能でもある。いわば、進行中の存在において、自らの可能性をその都度生きることそのものが、現存在にとっての「終わることの意味」を為しているとハイデガーは考えるのである。それは、死という、「いまだない」けれども、もっとも固有な可能性の切迫への先駆 (Vorlaufen, pro-tend) である。

「終末に向けて存在すること、それは『いまだない』であり、現存在は終末を切迫として迎へつつ、この『いまだない』へと係わっていくのです。現存在は『いまだない』を表象するのでも、それを考慮するのでもない。終末の迎接はまた待望でもありません」。(DMTp.54=61頁)

このような死の切迫した可能性に関わることによって、世界・内・存在としての現存在は脅威にさらされる。死は、「もはや現存在しなくなるという可能性」であり、決して追い越しえない可能性である。つまり、それが実現された瞬間に現存在は非・在となるという点で、他の諸可能性とは異なる、特権的で例外的な可能性なのである。ハイデガーが記述する死の可能性を、レヴィナスは以下の4点にまとめている。

- ①もっとも固有な可能性であり、固有性そのものを生起せしめるような可能性。
- ②譲渡不能な可能性であり——したがって私ないし自己性であるような可能性。
- ③孤立させる可能性。なぜなら、この可能性はもっとも固有な可能性として他の人間たちとのあらゆる絆を絶つからである。
- ④他の一切の可能性を凌駕し、他の一切の可能性を色褪せさせてしまうような極度の可能性。
この可能性によって、現存在は他のすべての可能性から引き剥がされ、他のすべての可能性は無意味なものとしてしまう。(DMTp.61=69-70頁)

つまり、この可能性はなにかを実現するものではまったくない。それは、あくまで可能性として維持されなければならないのである。『存在と時間』53節でハイデガーが述べているとおり、「可能性としての死はいかなる『実現すべきもの』も現存在に与えず、また、現存在が現実的なものとしてみずからそうであることのできるようないかなることをも、現存在に与えることがない」⁸。現存在は、生きている限り、自己の死の可能性を可能性のまま維持しつつ、それと係わりつづけなければならない。このような、可能性のうちにとどまるという現存在の態度によって結ばれる死との関係のことを、ハイデガーは先駆と呼ぶのである。

そして、ハイデガーにとって、死への先駆こそが、現存在の全体性を具現するものとなる。少し長いが、レヴィナスによるまとめを引用しておく。

「実存が実存の可能性と係わる振る舞いであり、可能性と係わりつつ実存することで実存が全体的なものとなれば、実存は死に臨むもの以外のなにものでもありえないでしょ

う。…自己に先立ってあるとはまさにこのこと、死に向けて存在することなのです（死に臨む存在が消えれば、同時に自己に先立ってあることも消え、現存在はもはや全体性ではなくなってしまう）。人間がその全体性において考えられるのはこのような仕方であり、また現存在はこのような仕方での瞬間にも全体的なものであるのです。つまり、自らの死との関係において人間は全体性として考えられているのです。（傍点引用者）」（DMTp.63=72頁）

4. ハイデガーとは別様に——倫理が呼び覚ます唯一性

このようにハイデガーは、現存在と死との関係を、これ以上ないほど緊密な関係として結びつけたのであるが、それは同時に、現存在の全体性を確立することでもあったといえる。ハイデガーが把握しようとしているのは、自己を所有し、固有なもの、本来的なものとしてあるような現存在の側面であり、この自己所有が「死に臨む存在」「死に至る存在」（*être-à-la-mort*）として現れる。そして、ハイデガーにとっては、このような特徴をもった現存在こそが、他者との関係や、世界との関係の起点なのである。

「死をめぐるハイデガーの分析で印象深いのは、死がそこでは、死に臨む存在に、現存在の構造に、根源における主体性に還元されていることです。存在とのこのような真の関係を起点として、他の人間が理解されているのです。」（DMT p.107=127頁）

別の視点から見れば、現存在の全体性、根源的な「私」の主体性は、他者のいかなる介入もなしに、現存在が自己の死に向き合うことを通してのみ確立されうることである。

レヴィナスは、この点においてハイデガーに異議を唱える。

他者の死に出会うとき、私が感じる戦きの正体は、果たして私も死にうること、私の存在が無になる可能性に直面することによって開示される「不安」なのだろうか？ むしろ、他者の死がもたらす動揺の方が、根源的なものなのではないのか。「死は、他者との関係から切り離しうるものなのでしょうか」とレヴィナスは問う。

「不安をかきたてる私の非・存在ではなく、私の存在以上に愛される者ないし他人の非・存在が問題なのです。…死との係わりは、私を待ち受けている死の不安ではなく、他者を私が迎接するということなのです。」（DMT p.121=144-145頁）

私が愛する大切なひとを喪うということによって被る底なしの苦しみと、いずれ私も確実に死ぬという可能性に直面することによる恐怖とは、直接には結びつかない。もしも、大切な他者が死んでいくのを目の前にして、私が、私自身の死の可能性ばかりをただちに案じるとすれば、それはあまりに非人間的な反応といわざるをえないのではないか。少なくとも、われわれは死に瀕した他者の苦しみに対して「無関心ではいられない（*non-indifférence*）」。

たしかに、ハイデガーが言うように、私は他者の死を代わりに死ぬことはできない。なるほ

どわれわれは「ほかの人の身替わりになって死地におもむく」ことはできても、「だれも相手からその人の死を引きとることはできない」⁹。このような死の代理不可能性こそが、ハイデガーにとって根源的な各自性の根拠なのであった。しかし、代替しえない他者の苦しみを前にして、われわれはその他者のために祈り、他者の苦しみを我がことのように苦しむこともまた事実である。他者の苦しみを苦しむことの中に、人間のうちの最も人間的なものが、言い換えれば「倫理的」なものが宿っているのではないか。それは私の意志や意図を超えて、死に瀕している他者の姿に思わず打たれてしまうこと、衝撃を受け、揺り動かされることである。

死にゆく他者の死は、その前にあって、責任を負った私の自己同一性を触発する、とレヴィナスは言う。ここに、ハイデガーが自己の死に基づく各自性として定式化したのとは異なる自己同一性が出来する。他者の訴えに応えること、その責任において代替不能な者としての「この私」である。

「この自己同一性は実体的なものではありません。…それは、語りえない責任からなる自己同一性なのです。他者の死による私の触発、他者の死と私との関係はこのようなものです。」
(DMT p.21=18頁)

もちろんレヴィナスがここで言う「自己同一性」は反省的に措定される自己の同一性ではない¹⁰。他者の死への直面によって触発される〈自我 (le Moi)〉とは、特異な者 (singularité) としてのこの私のことであり、他者に責任を負うことによるのみ、唯一の者 (unicité) として姿を現す。レヴィナスは、別のテキストで、この特異な自己同一性は、「倫理」に由来すると述べる。

『私の自己同一性』とは、『非-交換可能性』(non-interchangeabilité)、単独性、代替不可能であるというエートスのことである。…代替不可能であるというエートスも、もとをたどればあの有責性にゆきつく。私の、あるいは『おのれ自身』の自己同一性とは、『だれにも譲ることのできない』性格のことであり、それが有責性と一体をなしているのである。私の自己同一性は倫理に、つまり『選び』(élection) に由来するのである。」(DVI pp.253-254=309頁)

他者から指名された唯一性であり、私の外から、「自己に反して」到来するような自己同一性。しかし、このような〈自己〉は、能動的に引き受けることができない。レヴィナスは、『存在の彼方へ』の中でも、他者へ向かう主体の受動性について、以下のように述べている。

「主体の主体性ないし臣従はもっとも受動的な受動性であり、能動的に引き受けることのできないものである。」(AE p.70=140頁)

「それは自分自身の寛大さ (générosité) によっては引き受けることさえできない自己供与、

苦しみであり、自分自身に反した善良さであるような自己供与なのだ（傍点引用者）」(AE p.70=139頁)

私が代替しえない「この私」であることは、自己の意志の手前で、すでに他者の前に差し出されてあること(=自己供与)、逃れようもなく曝露されていることであり、この徹底的に受動的な主体の在り方をレヴィナスは「苦しみ」と形容するのである。

5. 問いかけとしての他者の死——まとめに代えて

愛する他者の死に直面しても、ひとがなお生き続けなければならないと自己に命じるのはなぜか。これが、本稿の議論を導く最初の問いであった。

愛する者の死という苦しみにも、何らかの意味づけを行うことができれば、たしかにその悲しみは、われわれにとって少しは耐えやすいものになるかもしれない。レヴィナスも、社会における慣習が、死の衝撃を和らげる役割を持つことを認めている。ヘーゲルが論じたように、葬儀という儀式は「死者を生きた思い出に変え」(DMTp.103=122頁)、生き残った者たちが思い出と祈りによって死者と関係を持つことを可能にする。このとき、他者との関係は、他者と私が同じ社会体に属するような社会での連続性と化し、死にゆく他者へと向かう『他のために』という対他性は有意味な行動として穏当な仕方ですり起す」(DMT p.133=160頁)ことになる。

しかし、こうした「思い出」によっても、なぜ愛するひとが死に、私が生き残ったのかという「生き残り」として苦しむ生者の問いに、答えを与えることはできない。死者の思い出に祈りを捧げるたびに頭をもたげるのは、その死を代わってやるができなかったことへの後悔と罪の意識なのではないか。私はそのひとの死に責任があった。私こそが彼の身代わりに死ぬべきだったのだという誇張された罪障感である。

「こうした触発、それは他者の死と係わりつつ、もはや応答することなき誰かに私が敬意を表することであり、それゆえすでにして罪障性——生き残りたることの罪障性なのです」。(DMT p.21=18頁)

死にゆく者の「身代わり」として名指され、自分だけが生き残った「罪障性」から逃れられないということによって、「この私」の唯一性は際立つ。とはいえ、私を強迫してくる他者は、決して私が死ぬことを要求するわけではない。レヴィナスは、身代わりとは「贖い」であると繰り返し述べている。主体性とは、「他者のために罪を贖うところまで責任をもつ」(EI p.120=127頁)ことなのである。それは、レヴィナスの言葉で言えば、「他者をひとりにさせないこと」である。

「他者の死に対する恐れと責任。たとえ他者の死に対するこの責任の最終的意味が容赦なきものを前にしての責任であったとしても。またそれが、絶対の極限において、他者をたった

ひとりで死に直面させてはならないという義務であったとしても、他者の死を恐れ、その死に責任を負わねばならない。…このような他者の死と対峙しながら、無力ながらも他者の死に立ち向かいながら、死という絶対の極限において《他者をひとりにさせないこと》、それは、私を召喚する要求に対し「われここに」(me voici) と答えることにすぎないかもしれない。しかしそれこそが、おそらくは、社会性の秘密なのであり、無償性と虚しさの極みにおける隣人への愛、肉欲なき愛なのである。」(EN p.140=186頁)

愛する者を喪った絶望の淵にあって、ひとは、なぜ自分だけが生き残ったのかという自責の念に襲われ、自己の存在を投げ出して身代わりになることをすら望む。しかし、そのギリギリのところ、死者に向かって「われここに」と答えなければならないという責任が、私がおも生きつづけることの意味を辛うじてつなぎとめるのである。

ある意味で、私が生き残りとして他者の死に向き合うことは、死という答えの出ない問いを問い続けることである。それへと向かう志向性の充実が果たされることが決してない「他者の死」という特異な事象は、了解可能な地平に合理的に位置づけることはできない。他者の死という事象において、われわれは二重の把持不能に襲われるのである。認識によっては接近できない他者の他者性において、そして、死という根源的に経験不能な虚無性において。したがって、他者の死へと向かう問いは、それが「何であるか」という形では答えを得ることがない。しかし、この問いは、それ自身が答えでもあるような問いであると、レヴィナスは言う。

「この問い——死という問い——は、それ自身が答えでもある。それは他人の死への私の責任でもあるのです。倫理的次元への移行がこの問いの答えをなしているのです(傍点引用者)。」(DMI p.133=159-160頁)

この問いは、決して魂と魂自身との「対話」ではなく、対話に先立つ「祈り」のごときものである。それを問うということ自体が、同時に他者への倫理的責任に答えることでもある、そのような特異な問いなのである。死という媒介を通じて他者へ向かうことが、いつのまにか自己の責任へと反転するような問い——問う者が問われる者でもあるような問いである。

この眩暈を催すような循環の中に、いわば狂気と隣合わせの自己同一性、最も受動的な主体性が現れる。実際には、社会生活において死の衝撃を覆い、耐えやすいものへと変えることによって、生者を慰め、苦しみに意味を与える物語は無数に存在する。しかし、そうした意味づけの物語の背後には、そもそも知によって把持することができない死の根源的な虚無性が横たわる。私はただ、他者の死から問いかけられる虚無の無意味さに耐え、曝されることによつてのみ、死にゆく他者への責任を果たすことができるのである。

*エマニュエル・レヴィナスの文献については、本文中に以下の略号を用いて、引用ページを記した。

AE=*Autrement qu'être, ou au-delà de l'essence*, Nijhoff,1974. (=合田正人訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫、1999年)

DVI=*De Dieu qui vient à l'idée*, Bibliotheque Des Textes Philosophiques,1982. (=内田樹訳『観念に到来する神について』国分社、1997年)

DMT=*Dieu, la mort et le temps*, Grasset & Fasquelle, 1993. (=合田正人訳『神・死・時間』法政大学出版局、1994年)

EI=*Ethique et infini: Dialogues avec Philippe Nemo*, Fayard,1982. (=西山雄二訳『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』ちくま学芸文庫、2010年)

EN=*Entre nous: Esseis sur le penser- à l'autre*, Grasset & Fasquelle,1991. (=合田正人・谷口博人訳『われわれのあいだで』法政大学出版局、1993年)

【註】

¹ ボルノーによれば、危機は一方で「生の健全な進行」を中断し、それに異議をさしはさむ「阻害的な変事」として現れるが、危機はまた他方で「必然的に人間の生に属する」ものであり、生がより高い次元に達しようとするとき避けられないものである。ボルノー『危機と新しい始まり——教育学的人間学論集』理想社、1968年、17-19頁。

² ボルノー、同書、111頁

³ ボルノー、同書、114頁

⁴ 講義録「死と時間」は、ジャック・ロランの序文をつけて、1991年出版の『カイエ・ドゥ・レルヌ』誌のレヴィナス特集号に掲載されたのが最初であるが、本稿で使用するのは、1993年に出版された“*Dieu, la mort et le temps*” (邦訳『神・死・時間』)に収められている講義録である。『神・死・時間』には、「死と時間」と並行して、同じ時期にソルボンヌにおいて行われていたもうひとつの講義「神と存在-神・学」が所収されており、各回の講義毎に、レヴィナス自身による詳細な註が付されている。

⁵ Rolland, Jacques ‘Avertissement’, “*Dieu, la mort et le temps*” pp.7-8. (ジャック・ロラン「前置き」(『神・死・時間』所収)2頁)

⁶ 「死と時間」の講義では、ハイデガー以外にも、フッサールやベルクソン、カント、ヘーゲル、フランク、ブロッホ等の哲学者の議論が検討され、これまで死がどのように扱われてきたかが論じられている。このうちハイデガーの『存在と時間』に関しては、24回の講義のうち7回分の講義を費やすなど、テキストの分量的にも他を圧倒しており、レヴィナスがハイデガーの議論を特に重視していることがうかがわれる。

⁷ ハイデガーによれば、現存在は、存在論的には「客体的なものという意味での存在者の事例や標本としては、決してとらえられない」。客体的な存在者は自己の存在に対して「無関心」である。それに対して、われわれが現存在の存在に対して呼びかけるときには、つねに「私」や「あなた」といった「人称代名詞」を言い添えなくてはならない。このときに表れる「人称性」をもった様態として存在するのが現存在の特徴であり、とりわけ「みずから存在しつつこの存在そのものに関わり合っている」ような「この私」の在り方のことを「各自性」と呼んでいるのである。Heidegger, Martin “*Sein und Zeit*” Max Niemeyer Verlag,2006,p.42.

(細谷貞雄訳『存在と時間 (上)』筑摩書房、1994年、109-110頁)

⁸ Heidegger, Martin “*Sein und Zeit*” p.262. (『存在と時間 (下)』筑摩書房、1994年、84頁)

⁹ Heidegger, Martin “*Sein und Zeit*” p.240. (『存在と時間 (下)』39-40頁)

¹⁰ 通常の意味での「自己同一性」は、自己を自己として再認することによってつなぎとめられている。そこでは自己は、認識の主体となって今まさに世界に向かって前-反省的な自己と、その自己を振り返り認識しようとする自己とに分裂し、二重化されている。しかしレヴィナスが言う他者への責任の主体としての自己同一性は、認識が自己へと向かう手前の様態である。それゆえ、自己は再-現前化によって時間的に取りまとめられることがなく、自己自身とつねにズレ続ける「筋立て」という不安定な様態において存在している。村上靖彦『レヴィナス 壊れものとしての人間』河出書房新社、2012年、関根小織『レヴィナスと現れないものの現象学』晃洋書房、2007年を参照。